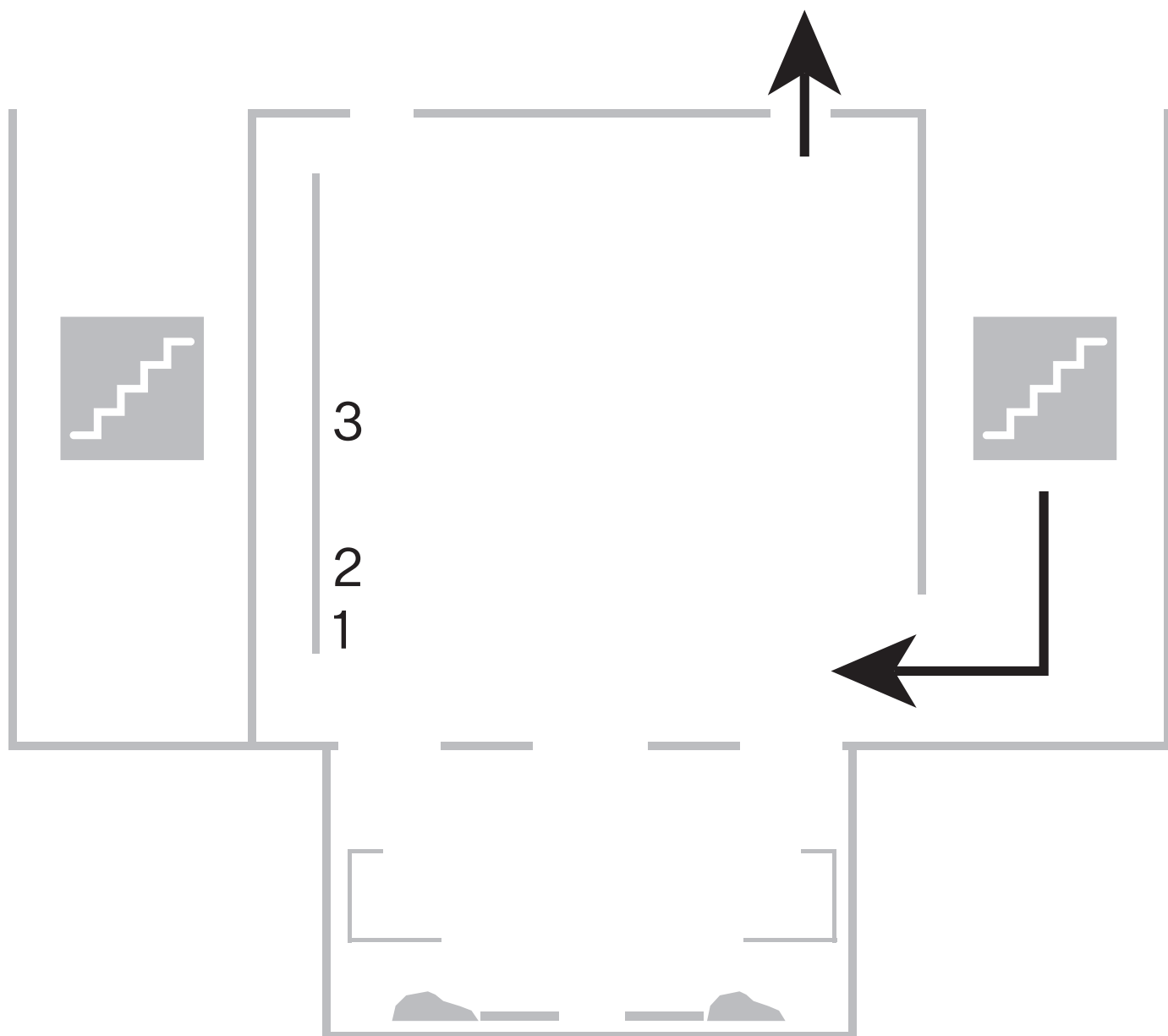


日本語訳

Russel Wong | Life IN KYOTO | IN EDO



特別展ギャラリーへ



ホワイエのフロアマップ

1 浮世絵

浮世絵(『浮世の絵』)は日本の絵画、版画、挿絵のジャンルのひとつで江戸時代(1603-1868)に始まった。当時人気を博した絵師の作品は現在日本国内外で展示されている。これらの作品は江戸時代の都市生活者の人生のあらゆる側面を描いている。「浮く」とはこれらの版画の主題が絶えず変化していることを表している。しかしそれらの木版画は紙に印刷されたものであり、流行している情報を伝えるメディアとして意図されていたため、結果として短命である関係性により文字通り「速く動く」ものでもあった。

幅広い主題

これらの版画にはチラシ、劇場のビラ、ポスター、招待状などの実用的な機能があった。それらは風光明媚な景色、名所、人気の高い旅行先を記録し世に広めた。それらは美男美女に不朽の名声を与えた。歴史や伝説、演劇さらにはポルノグラフィー(春画)の場面もが描写された。この多様性は江戸の経済的活力の高まりと浮世絵の鑑賞や購入を含め、余

暇、買い物またその他の娯楽への個人消費の増加を反映している。

2 絵師の紹介

江戸時代、浮世絵の鑑賞者はほとんどが庶民だった。絵師はトレンドを先取りし常に流行の一步先を行くことを期待されていた。それに応えて、日本美術史の視点からはほとんど奇跡的現象とも思われるが、何世代にもわたって素晴らしい才能が生まれた。

これが特別展であなたが出会う選りすぐりの有名な絵師である。北斎、広重、歌麿など、大半が下の名前だけでよく知られている。多くが過去の有名な絵師や詩人にちなんで雅号をつけた。

鈴木春信 (1725 - 1770)

春信は錦絵として知られる多色摺木版画の発展において、指導者的な役割を担った。これらは最初、絵暦として作られた。それぞれの色ごとに別の版本を使った初めての版画であった(この技術がのちに基準となった)。ユニセックスな顔付きや細身の身体つきが特徴である美しい女性たちを描いた晴信の絵

(美人画)が彼を有名にした。

喜多川歌麿 (1753? - 1806)

歌麿は美人画(美しい女性たちを描いた絵)ジャンルを専門とする高名な絵師の一人であった。彼のデザインの中で女性の美しさや優雅さを伝える名人であり、描く女性の上半身のみを大きく描く大首絵は非常に人気だった。歌麿の主題は多岐に渡っていて、遊女たち (ほとんどは最も位の高い花魁)、街娼、芸者の吉原遊郭の世界や、給仕の娘、家庭の主婦など他の江戸の美人達、また子どもたちと一緒にいる母親なども描いている。彼は女性たちを生き生きした端正な顔立ちで描き、彼女たちの幅広い精神生活や感情を鮮やかに表現したのだった。

歌麿とは何者か？

この絵師の生涯についてはあまり知られていない。どこで生まれたのか？ 侍、農民、商人など、どの階級出身だったのか？ 妻や子どもはいたのか？ 彼の版元である蔦屋重三郎は、彼に本名を元にした「雅号」歌麿を使うように勧めた。「喜多川」がはたして彼の出生名かどうかはわからない。ただ彼が1806年に53歳で亡くなったことは分かっている。

東洲斎写楽 (活動期間 1794 - 95)

写楽は木版画の世界では最もミステリアスな絵師である。彼の名は、有名な版元の蔦屋重三郎によって世に出された28枚のシリーズから成る、独創的で表現に富んだ俳優たちの絵(役者絵)とともに1794年5月に突然現れた。10カ月後、突然写楽は消えてしまった。彼は何者だったのか？ 彼の真の正体についてはかなり議論されてきた。現在の説では彼はおそらく阿波地方(今日の徳島県)の能役者、斎藤十郎兵衛ではないかとされている。

謎の人格、しかし高度なスキル

写楽は洞察力に富んだ観察者で、個々の役者の特徴的なポーズを捉えることができた。彼の一風変わった大首絵★は、役者の真の個性を見せようとしたが、理想化して描こうとはしなかった。初期の頃は、大首絵に雲母（きら）刷り技術を使用した(背景に輝きのあある効果を作り出すため、顔料に雲母を加えた)。その後、幅の狭い細判サイズの紙を使って、全身像を描くようになり、雲母（きら）刷りから離れた。当初彼は「東秋斎写楽画」と読める落款で作品に署名していたが、後に「写楽画」だけとなった。

★大首絵 主に江戸時代に描かれた浮世絵の様式のひとつで、歌舞伎役者や遊女、評判娘などを半身像や胸像として捉えて描いた浮世絵版画。

写楽とは何者か？

数少ない芸術的傑作を除くと、彼の生涯について何も分かっていない。生年月日はいつなのか。苗字は？ 活動したのは何歳だったのか？ 雅号はどこから来たのか？ なぜこんな短期間の創作活動の後に、姿を消したのか？ 私たちは何も知らない。

葛飾北斎 (1760 - 1849)

北斎は1760年、江戸隅田川沿岸の本所地区★で生まれた。幼名は時太郎。葛飾郡で生まれたことがおそらく雅号の由来である。

★本所地区 武蔵国葛飾郡本所割下水（江戸本所割下水。現・東京都墨田区の一部）

修行と長いキャリア

勝川春章の弟子として、北斎は役者絵(俳優版画)を生み出した。20歳の時に最初の版画が春朗という雅号で出版された。35歳で春章の工房を離れ、幅

広い風俗画の中で自分のスタイルを探求し始めた。風刺詩の絵本(狂歌絵本)や大衆小説の挿絵に加え、絵師見習い向けの手引書「北斎漫画（北斎によるスケッチ）」を50代半ばで出版した。風景画「富嶽三十六景」を発行したのは、70歳を超えてからだった!

西洋美術への影響

北斎は間違いなく世界で最も有名な木版画家である。ヨーロッパで北斎が知られるようになったのは偶然であった。1850年代、フランスの版画家フェリックス・ブラックモン(1833-1914)は、事もあるうに 版画工房の主人が輸入した陶磁器の梱包材として使われていた北斎漫画の一編を目にしたのだった。ブラックモンは北斎のスケッチ力と斬新な芸術的構図に魅了された。この偶然の発見と、そこで見たものを元にしたブラックモンのデザインが、「ジャポニズム」という日本のスタイルの影響を受けた西洋美術の運動を引き起こした。フィンセント・ファン・ゴッホ、エドガー・ドガ、クロード・モネ、グスタフ・クリムトといった多くの芸術家が日本の版画の影響を受けた。

エキセントリックか変人か？ 北斎の正体

北斎は、その変わった性格と風変わりな行動で知られる。北斎は、しばしば画号と居住地を変えた。生涯で93回も家を引っ越したのだ。また、120畳（約200平方メートル）の巨大なだるまの絵を作成した。残念なことに、それは第二次世界大戦中に爆弾により破壊されてしまった。そして北斎は、繰り返し作品のスタイルと取り組むジャンルを変えた。

女性の浮世絵師？

葛飾北斎の娘は名を阿栄、画号を応為と言い、父親を手伝い自分の作品も制作した。応為は、特に美人画を描くことに長けていた。作品では、しばしば光と影のコントラストを効果的に使っている。残っている作品は、ほんのわずかだ。この展覧会では、もう一人の女性浮世絵師の作品を紹介している。歌川鳥女または芳鳥女（1839年生まれ）という名の国芳の娘だ。彼女が父親と共同で作った版画を観てほしい。

歌川広重 (1797 - 1858)

安藤徳太郎は、1797年に江戸の弥生橋で下級武士の家に生まれた。彼の父は近くの将軍の城で防火を担う定火消を務めた。早くに孤児となった広重は、13歳で浮世絵師の歌川豊広のもとに修行に入った。

旅行シリーズが彼を有名にする

1833年に保永堂によって出版された広重のシリーズ東海道五十三次は、彼に名声をもたらした。そのシリーズは、将軍に代わって（贈呈品の馬と共に）皇帝に毎年敬意を表するために京都へ向かう役人と一緒に彼が旅行した期間の、1832年にスケッチされた絵に基づいていた。当時旅行への関心が非常に高かったため、このシリーズは大成功を収めた。

革新的な芸術スタイル

東海道シリーズによって広重は最も著名な風景画の絵師の地位を確立した。西洋の線遠近法(透視図法)を巧みに応用した彼の構図の取り方は素晴らしかった。そして色を重ねていく多色摺りは彼の風景に豊かな叙情的スタイルをもたらした。

江戸の世界への窓

広重と北斎は旅を大変好んでいた。彼らは旅に出ることを望んでいた。旅の途中で出会った人々と語り合い一再会した時には大声で叫んだ。彼らの風景画を合わせると江戸の旅行記のようになる。

広重の風景は、感動と憧れ、悲しみ、そして喜びに満ちている。日本の美しさを求めて一年のうちのさまざまな時期に国の隅々まで旅をしたことから「放浪癖の絵師」と呼ばれることもあった。彼は1858年、当時流行り病だったコレラによって突然の死を迎えた。

歌川国貞、別名 三代目豊国(1786 - 1864)

歌川豊国の弟子として、国貞は主に役者絵と美人画のジャンルで活躍した。晩年、豊国の名を襲名し、歌川派を率いた。彼は生涯で数万点の作品を生み出し、作品数の最も多い絵師となった（40枚の版画の展示により、彼はACMの今展示で最も代表的なアーティストである）。彼の時代には北斎、広重、国芳よりも高く評価されていた。

歌川国芳 (1797 - 1858)

国芳は江戸の日本橋(現在の日本橋本石町辺り)に生まれた。子供の頃、彼は父親の営む紺屋(染物屋)を手伝っていた。幼名は芳三または芳三郎、1810年頃に歌川豊国（1769 - 1825）の工房へ生草孫三郎の名で入門した。17歳の頃、歌川国芳という名前で作品に署名する(号する)権利を得た。

多くの媒体での経験

1827年に発表された水滸伝シリーズ『通俗水滸伝 豪傑百八人之一個(壺人)』は国芳を有名にした。躍動感に溢れたダイナミックな絵の構図、多彩な色使いが賞賛された。彼はまた、幼少期の染物屋での経験と話題のファッションを刺青*に活かした。

※『通俗水滸伝 豪傑百八人之一個(壺人)』で豪傑たちは華麗な刺青を入れて描かれている。

珍しい題材

水滸伝シリーズが有名になったことで、国芳は芸術の世界で突出した地位を築いた。彼は“武者絵の国芳”と呼ばれファンを魅了した。彼の興味深い作品の中には、妖怪、幽霊、鬼が描写されている。風景画には西洋的な要素が取り入れられ、動物を擬人化

した戯画や社会への風刺画も多くに関心を引いた。
彼は無類の猫好きでもあった。国芳は江戸の玄治店
(注：現在の日本橋人形町)にある自宅で63歳で亡
くなった。

3 ラッセル・ウォン

ラッセル・ウォン（1961年生まれ）は、国際的に
有名なシンガポール生まれのファッション・ポート
レート写真家で、リチャード・ギア、ジャッキー・
チェン、ミシェル・ヨー、チャン・ツイー、イザベ
ラ・ロッセリーニなどのオスカー受賞監督やハリウ
ッドセレブと25年に渡り仕事をしてきた経験を持
つ。ラッセルはタイム誌の表紙撮影を担当する精鋭
の写真家たちの一人である。ポートレート写真に加
えて、静物、建築、風景などの一連の作品も手がけ
ている。